令和三年（二〇二一）三月二十六日発行
『大倉山論集』第六十七輯抜刷
（公益財団法人　大倉精神文化研究所）

白華文庫蔵「真宗説教」について

川邉雄大

白華文庫蔵「真宗説教」について

川邉雄大

目次

はじめに
一　明治初期における東本願寺の中国布教
二　上海別院における松本白華
解題
凡例
翻刻

はじめに

筆者はこれまで、明治初期に東本願寺（真宗大谷派）が行った中国布教と、同派上海別院における日本人僧侶と清末文人との漢詩文を介した文化交流について、加賀出身の真宗僧である松本白華と北方心泉[1]を中心に、本誓寺（石川県白山市）・白山市立松任図書館白華文庫（同）所蔵の白華旧蔵資料や、常福寺（金沢市）所蔵の心泉旧蔵資料などを用いて研究を進めて来た。

明治初期から戦前までの東本願寺の中国布教について詳述したものに、『東本願寺上海開教六十年史[2]』がある。これは編纂当時、上海別院に所蔵していた資料や、小栗栖香頂[3]・谷了然[4]・岳崎正鈍[5]、菊池秀言[6]ら布教僧の旧蔵資料や、彼らからのインタビューをもとに編纂されたもので、そのインタビューや翻刻資料を収録する。

このほか先行研究として、日本仏教の布教権に関するものに、佐藤三郎「中国における日本仏教の布教権をめぐって[7]」、入江昭「中国における日本仏教布教問題―清末日中関係の一断面―[8]」、藤田賀久「侵略と連帯の交錯―日本仏教の布教権要求と対華二一か条を中心に[9]」、小川原正道「対華二十一箇条要求と仏教―布教権をめぐって[10]」がある。

日清戦争後に東本願寺が中国各地に設置した東文（日文）学堂に関するものに、細野浩二「清末中国における「東文学堂」とその周辺―明治末日本の教育権収奪の論理をめぐる素描―[11]」、久木幸男「金陵東文学堂と清沢満之[12]」、劉建雲「清末中国における東本願寺の東文学堂[13]」がある。

中国布教を進めた小栗栖香頂について詳述したものに、陳継東『清末仏教の研究―楊文会を中心として[14]』・同『小栗栖香頂の清末中国体験―近代日中仏教交流の開端[15]』、中村薫『日中浄土教論争―小栗栖香頂『念仏圓通』と楊仁山[16]』・同『楊仁山の「日本浄土教」批判―小栗栖香頂『真宗教旨』をめぐる日中論争[17]』などがある。

これらは、外交資料や宗門の雑誌記事あるいは浄福寺（山形県酒田市）・妙正寺（大分市）・永福寺（福岡県久留米市）などの寺院に遺されていた布教僧の旧蔵資料を活用するが、いずれも白華と心泉の旧蔵資料は用いていない。

筆者は、白華については自身の学統である咸宜園の人脈が、明治初年における東本願寺と明治新政府との関係構築や、海外宗教事情視察（明治五～六年）の実施に大きな役割を果たした点や、白華のように咸宜園およびその系統の塾で学んだ真宗僧が、その後本山や海外布教で活躍した点を明らかにした。心泉については、明治十年代および三十年代に清国に渡航しており、布教活動の変遷や清末文人との交流の実態や、この交流を通じていかに書家となっていったかについて明らかにした。

その研究成果として、博士論文「明治期の東本願寺上海別院における布教活動と文人交流―北方心泉・松本白華を例として」（二松学舎大学、平成二十二年三月）をまとめた拙著『東本願寺中国布教の研究』[18]を出版した。

その後、筆者が研究代表をつとめる科研費「北九州の真宗を例とした仏教近代化に関する基礎的研究」（研究課題番号２４６１７０１８、基盤研究（Ｃ）、平成二十四年度～二十六年度）が採択された。本研究では、海外布教に従事した真宗僧に九州出身者や私塾・咸宜園の出身者が多かった点に着目して、東本願寺の中国および琉球布教等について研究を進め、その成果をまとめた『浄土真宗と近代日本―東アジア・布教・漢学』[19]を出版した。この間、白華の自坊である本誓寺・白華文庫、心泉の自坊である常福寺、上海図書館蔵書楼（中国・上海市）などで、引き続き関係資料の調査を進めるとともに、資料翻刻を行ってきた[20]。

このたび翻刻する「真宗説教」（以下、本資料）は、白山市立松任図書館白華文庫に所蔵する松本白華旧蔵資料の一つである。

松本白華は東本願寺の僧侶で、天保九年十二月十三日（一八三九年一月二十七日）に加賀国松任の坂本山本誓寺に

同寺第二十四世達命の次男として生まれた。幼名は隼丸、名は厳護、白華・西塘・林泉・孤末・仙露閣と号した。

嘉永三年（一八五〇）に、京都で宮原節庵[21]に書を、海原謙蔵・劉昇[22]に漢学を学び、嘉永五年（一八五二）に大坂の廣瀬旭荘[23]塾（大坂咸宜園）に入門し、咸宜園出身の長三洲・劉石秋・柴秋邨らと出会っている。

幕末維新期、諸宗同徳会盟に参加したほか、明治二年（一八六九）には浦上四番崩れで金沢に流刑されたキリシタンの改宗活動や、明治三年（一八七〇）に発生した富山合廃寺事件では現地に赴き実況見分にあたった。

明治四年（一八七一）、白華は小栗栖香頂や、その弟の小栗憲一[24]らとともに、東京で宗名恢復（一向宗→浄土真宗）に従事した。

当時東京では、秋月橘門や長梅外ら咸宜園出身者を中心に漢詩結社・玉川吟社[25]が結成されており、白華もこれに参加した。白華はここで漢詩文による交流を行ったほか、主宰者の一人である長三洲（長梅外の子）を通じて、江藤新平との関係を構築することに成功し、東本願寺の海外視察を実現した[26]。

白華は明治五年（一八七二）から明治十年（一八七七）まで教部省の官吏をつとめたが、この間、明治五年（一八七二）九月から大谷光瑩（現如）、石川舜台、関信三、成島柳北（旧幕臣）とともに海外視察を行っている（白華と現如は翌年八月に帰国）。明治十年（一八七七）十一月から十一年（一八七八）八月まで上海別院輪番をつとめ、明治十二年（一八七九）二月に帰国した後は本誓寺に戻り遙及社を再開し、真宗学を中心とした地元子弟の教育にあたった。

明治四十三年（一九一〇）、本山議制局議長に就任し、明治四十四年（一九一一）に権僧正、大正十四年（一九二五）に僧正となり、大正十五年（一九二六）二月五日に歿した。享年八十九歳。

昭和二年（一九二七）、本誓寺の境内に鉄筋コンクリート二階建ての書庫・白華文庫が落成し、白華の旧蔵書等が

収蔵されたが、のちに松任市中央図書館（現白山市立松任図書館）へ移管され、『松任本誓寺　白華文庫目録』[27]が刊行され、現在にいたっている。

著書に『正因弁惑論』（明治十七年）が、漢詩集に『金城繁華三十関』（明治四年）、『西塘俚歌』（明治二十二～二十四年）、『越蓑能笠』（明治二十二年）、『白華餘事』（大正五年）があるほか、歿後に洋行日記『松本白華航海録』[28]（漢文、明治五～六年）や、『白華護法録』[29]、『白華備忘録』[30]、『白華教部省雑纂』[31]、『露珠閣叢書』[32]、『備忘謾録』[33]が翻刻されている。

一　明治初期における東本願寺の中国布教

ここで、幕末維新期の東本願寺が置かれた状況や、海外布教にいたるまでの経緯、中国布教の実態を見ていきたい。明治初期、宗門では以下の改革を進めていた。

① 本山改革（寺侍から僧侶による宗務）
② 海外宗教事情視察（大谷光瑩・松本白華・石川舜台・関信三・成島柳北）
③ 翻訳局開設（局長成島柳北、サンスクリット・キリスト教関係洋書の和訳）
④ 英国への留学生派遣（サンスクリット研究、笠原研寿・南條文雄）
⑤ 禁教地・海外布教（北海道・鹿児島・隠岐・琉球・清国・朝鮮など）
⑥ 教育制度改革（学寮→教校）

この時期、白華は②海外宗教事情視察（明治五～六年）に参加し、これを受けて③翻訳局開設・④英国への留学生

派遣が行われた。その後は⑤海外布教に従事し上海別院輪番（明治十～十一年）をつとめており、白華は宗門において大きな役割を果たしている。

なお、前述の通り幕末維新期に本山で活躍した僧侶には、咸宜園およびその系統の私塾出身者が多くいたが、白華もまたその一人であった[34]。

次に、明治期における東本願寺の中国布教について見ていきたい。

小栗栖香頂は明治六年（一八七三）に、白華の帰国と入れ替わる形で「支那弘教係」として北京に滞在し、中国語（北京語）を習得するとともに、各地を視察したほか、日中印仏教三国同盟を結ぶことなどを提唱した。香頂の弟である小栗憲一は、香頂の手紙をまとめた「支那開宗見込[35]」を本山に提出し、チベット仏教（ラマ教）と聯繫すること、南京を布教の拠点とすることや、阿弥陀如来のほかに太神宮や孔子を祀ることなどを提唱した。香頂は帰国後、『真言宗大意』（一八七七年）・『喇嘛教沿革』（同）や、布教用テキスト『真宗教旨』（漢文、一八七六年）を執筆し、この『真宗教旨』はのちに中国・朝鮮布教で使用された。

当時、東本願寺は長州閥と緊密であった西本願寺（浄土真宗本願寺派）に対抗する意味から、江藤新平・三條実美ら長州閥でない明治新政府要人との関係を強化した。

江藤新平は岩倉具視に提出した「対外策[36]」（一八七一年三月五日）の中で、日本人僧侶を布教と諜報にあたらせようとする旨の建言を行っており、香頂の中国渡航は、この意響を受けて行われたものであったと思われる。

その後、江藤は征韓論（明治六年の政変）によって下野したが、東本願寺は江藤に代わって大久保利通との関係を構築した。

東本願寺は明治九年（一八七六）に琉球・上海で、翌明治十年（一八七七）には釜山で布教活動を開始した。小栗

栖香頂は中国布教にあたって外務卿寺島宗則から、奥村圓心は朝鮮布教にあたって大久保からそれぞれ激励を受けたとされる[37]。さらに、琉球布教にあたった田原法水は、明治十年（一八七七）に発生した真宗法難事件（琉球藩庁が信徒を逮捕・処罰した事件）[38]に際して大久保に直訴している。こうしたことから、東本願寺の海外布教（琉球・清国・朝鮮）は大久保等の意響によるところが大きかったと思われる[39]。

さて、小栗栖香頂・谷了然・倉谷哲僧・崖辺賢超・日野順證（当初の予定では占部順謙）は明治九年（一八七六）七月十三日、河崎顕成は同月二十日に上海に到着し、八月十二日に上海英租界北京路に上海別院を開院し、二十日に御入仏供養会を行ったが、その主たる目的は中国人に対する布教活動であった。別院設置に先立つ七月十九日には、日本領事館の一室を「語学校」として、日本人留学僧の崖辺賢超・日野順證に対して中国語教育（南京語・上海語）がはじまり、のちに本山直轄の八大教校の一つである江蘇教校となった。また、谷らは武漢・南京などの長江流域（七月二十八日～八月十日）[40]や、浙江省・江蘇省（九月五日～九月二十六日）[41]を視察している。さらに、中国文人による翻訳説教（上海語）が行われたほか、「真宗説教」（漢文、第一号～第九号）が岳崎正鈍や白華ら日本人僧侶によって執筆されているが、これは説教用のテキストだったと思われる。なお、後述するようにこのたび翻刻する本資料は、この「真宗説教」をのちに改めて印刷・出版したものである。

一方、日本人居留民に対しても、日本人布教僧によって説教・仏事・葬儀が行われていたほか[42]、医療・教育・日本人墓地の管理など公共のサービスも行われた。当時上海にはまだ日本人医師がおらず、明治十年（一八七七）に日本から医師早川純嘏が別院に派遣された。早川の帰国後も日本から医師を呼び寄せて、引き続き活動を行った。同年九月一日に育嬰堂が開設され、小学教育が行われた。明治十六年（一八八三）には、同じく小学教育を行う親愛舎が開設されている。このほか、洋妾向けの教育が小栗栖香頂の妻、郁によって行われている。

しかしながら、明治十一年（一八七八）三月、海外布教に積極的であった石川舜台が宗務の長を辞任し、同年三月渥美契縁に交替した。これにより、石川に近かった北方祐央（心泉の兄）・谷了然（上海別院初代輪番）は寺務所役を罷免され、同じく白華・心泉等は更迭され帰国することとなった。

明治十二年（一八七九）に上海別院は消滅した形となり（実際には存続）、明治十四年（一八八一）には実在しない北京別院の上海出張所に格下げされた。

その後、明治十八年（一八八五）に布教活動は再開されるものの、その対象は中国人ではなく、在留邦人であった。

二　上海別院における松本白華

ここで、上海別院における白華の活動について見ておきたい。

前述の通り、白華は明治十年（一八七七）十月四日上海別院に到着し、十一月四日から明治十一年（一八七八）八月六日まで上海別院の輪番をつとめ、宗務や日本人留学生の監督のほか本資料の作成にあたった。

この間、白華は仏教者との交流を進め、楊仁山と会見し、当時ロンドンに留学中だった南條文雄を紹介している。また、白華との交流を通じて信者となり、小栗栖香頂『真宗教旨』を自費で覆刻した蘇州の許霊虚などがいた[43]。

一方、上海別院では前述した宗務のほか、白華や心泉をはじめとする日本人僧侶と清末文人さらには日本文人との漢詩文を介した交流が進められていた[44]。

岳崎正鈍「支那在勤襍志」（以下、岳崎「襍志」）[45]には、これらの交流を持った海上派文人や、日本文人に大倉雨村[46]・内海吉堂[47]・巨勢小石[48]・鳩居堂安兵衛[49]・吉嗣拝山[50]らの名が見える。

白華旧蔵の葛元煦『滬游雑記』四巻（光緒二年（一八七六）序、白華文庫蔵）には、白華らが交流を持ったと思われる、徐三庚（字辛穀）をはじめとする左記の文人名に丸印が記されている。

呉淦（字鞠潭）・湯経常（字壎伯）・金爾珍（字吉石）・衛鋳（字鋳生）・張熊（字子祥）・王礼（字秋言）・胡遠（字公寿）・朱偁（字夢廬）・任頤（字柏年）・楊伯潤（字盃佩甫）・鄧啓昌（字鉄仙）・唐禄（字芸閣）・陳若木（字崇光）・舒浩（字萍橋）・謝岷（字采山）・章鐘（字銘甫）・銭慧安（字吉生）・胡璋（字鉄梅）・張寶生（字善天）・銭鴻鳴（字梅生）・金（字松泉）・王荃（字友棠）・王寅（字冶梅）

このほか白華文庫には、白華が上海で記した『雑録』・詩稿『西塘詩稿』・『西塘丁丑詩稿』を所蔵する。[51]

『雑録』は、白華が上京した明治四年（一八六二）から明治十年（一八七七）一月に教部省が廃止されるまでの期間に作られた漢詩や、上海別院の会計簿や規則などを合冊したもので、当時別院から出版した本資料や『日本外史』の編輯・出版に関する記述が見られる。

『西塘詩草』は主に、明治六年（一八七三）の欧洲帰国から八年（一八七五）頃までの漢詩を収録したもので、清末文人の陳曼寿（明治十年十月、本山の中国語講師）・蔣文虎（明治十一年六月、上海別院上海語教師）・王冶梅（明治十年十一月二十六日）の序、孫靄人（明治十一年一月、上海別院南京語教師）・銭子琴（明治十年十二月）の跋および評を載せている。彼らは語学教師などで別院に頻繁に出入りして日本人布教僧と交流した人物である。

『西塘丁丑詩稿』は、冒頭に海外視察時（明治五年）の「彼皚々者」を収録するほか、丁丑すなわち明治十年（一八七七）二月に教部省廃止にともない廃官以後の漢詩、「二月廿二日与逵天忱勝拝石同探梅於城東田端村時余解職将辞東京句中故及」や、上海出発前の漢詩から到着後の十月二十九日までの漢詩「九月廿五日将赴清国賦一律留別」、「浪華客中買舟遊于海口」、「神戸」、「舟過須摩浦有感於寿永年間事」、「舟抵赤馬関」、「崎陽」、「九月四日入滬城」、

「送谷了然率生徒（遠藤・栗山・久連松）往北京」、「十月念九訪龍華寺贈懐蓮禅師」などを収録する。そして末尾に毛祥麟（明治十一年二月）と梁景鴻（明治十一年七月）の跋文と文中に両者の評点がある。

しかし、晩年編纂された『白華餘事』（大正五年）を見ると、「九月廿五日将赴清国賦一律留別」が「将遊清国過浪華逢弟厳整」と改題された以外、『西塘丁丑詩稿』から上海時代の漢詩は収録されておらず、その他の日本国内での漢詩にも改作されたものや未収録のものが多い。しかも前述したように、『西塘詩稿』・『西塘丁丑詩稿』には海上派文人の加評や序跋が記されているものの、『白華餘事』には清末文人たちの序跋は掲載されず、評点も『白華餘事』稿本に附され、刊行にあたって参照された小栗憲一の註ほどは反映されていない。[52] その『白華餘事』には、次のような上海を詠じた漢詩があるが、晩年の白華にとって、上海の気候や生活は、明治五年から六年にかけて行われた欧洲視察と比べても芳しいものではなかった。

将辞滬上有此作

奇寒酷暑病痾媒、燈影沈々百感来、埃気朝吹窓底霧、車声夜響地下雷、床虫襲枕痒為瘡、泥潦烹茶色似煤、却是多銭驕傲客、寥々不賞一枝梅

白華の後任輪番で、咸宜園で学び白華とは同門にあたる渡辺蘭谷[53]は、帰国後出版した漢詩集『遠明堂詩鈔』（明治二十四年）に、上海時代に作詩した漢詩のみならず、広瀬青村・広瀬林外・横井継祖・吉田繖城・小栗栖香頂・劉（秋月）士新ら咸宜園の同門のほか、任鈞渓・鄭承吉・孫靄人・蔣文虎・鄭之驥・鄭之驊・陳曼寿ら海上派文人の序跋や評を収録しており、その中国での体験は白華とは大きく異なる。

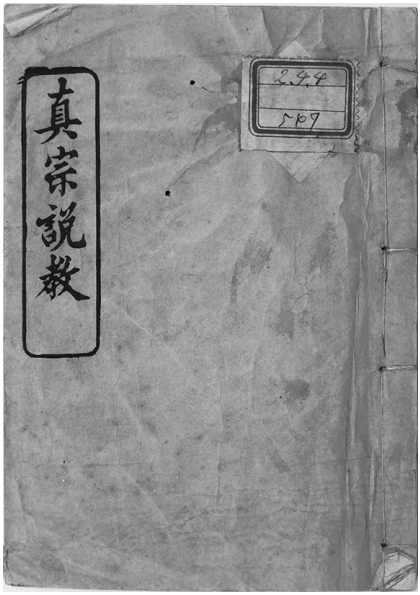
また、白華とともに上海別院に在勤した心泉が、足掛け六年に亙って海上派や杭州文人との交流を深めたことがきっかけとなって書家を目指し、日清戦争後に再び渡清し東本願寺が南京に設立した金陵東文学堂長をつとめ、細野

燕台に「支那かぶれ」[54]と称されたのとも大きく異なる。

解題

つぎに、本資料について見ていきたい。

前述の通り、明治初期に東本願寺が上海別院を設置した主たる目的の一つは中国人への布教であった。そのため、上海別院の設置に先立って日本領事館の一室に語学校（のち江蘇教校）を設置し、日本人留学生に中国語教育（南京語・上海語）が行われた。同時に、別院では中国人を雇傭して現地人向けに中国語（南京語・上海語）で説教を行っていたが、これは日本人僧侶が漢文で文章を作成し、それをもとに中国文人が説教を行ったものと思われる。本資料は全文が漢文で記されており、そのテキストにあたるものと推測される。



【写真①】「真宗説教」表紙

当時、上海別院に在勤していた岳崎正鈍の漢文日記「支那在勤襍志」（以下、岳崎「襍志」）には、職務として①江蘇教校の授業・試験監督、②説教③仏事のほか、④「真宗説教」の編纂に関する内容が記されている。これによると、「真宗説教」第六号から九号までの執筆に関する記事が見える。[55] また、前述した『雑

録』（白華文庫蔵）に「（明治）十一年一月経費」として、「六元　説教第七八号七百部摺立製本」とあるので、七号は明治十年（一八七七）九月に、八号は十月に執筆され、翌明治十一年（一八七八）一月に七百部が別院の豫算で印刷・製本されたことが分かる。

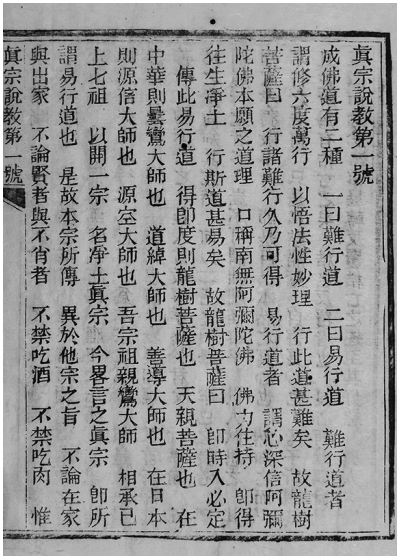
さて、本資料は縦一六・一センチメートル×横一一・四センチメートルの冊子体で、「真宗説教」の第一号から第九号までを収録している。

『雑録』（白華文庫）の「（明治十一年）四月経費」に、「九圓五拾銭　説教第一号ゟ製板」とあり、本資料を指すものと考えられる。つまり、上海別院で中国人向けに毎号発行・配布されていた「真宗説教」を、明治十一年（一八七八）四月に改めて第一号から第九号までを改めて印刷・製本し、中国人向けに配布したのである。

版式は、第一号から第七号までは十二行二十四字（写真②）で、第八号および第九号は九行二十五字（写真④・⑤）と異なっている。また、六号末尾に「上洋馬福堂刻印」（写真③）、八号末尾に「上海新北門内謝潤卿刊」、九号末尾に「上洋新北門内謝潤卿刊字」（写真⑤）と記されていることから、第一号から第七号までは上海の馬福堂で、第八号および第九号は上海城内の新北門附近にあった謝潤卿で刻されたことが分かる。

本資料は、仏教および真宗の教義について漢文で簡潔に記されており、『無量寿経』などの仏典や『正信偈』の一節を引用するほか、『中庸』・『論語』・『孟子』・『詩経』といった漢籍からも文章を引用している。明治六年（一八七三）、香頂は「支那開宗見込」（前出）の中で、中国布教にあたって本堂には阿弥陀如来のほかに太神宮や孔子を祀ることを提言しているが、本資料もまた中国の状況に合わせて説教を行っていたということであろうか。さらに、本文中には王法為本・真俗二諦に関する記述が見られるが、当時の中国人がこれをどう感じたか興味深いところである。

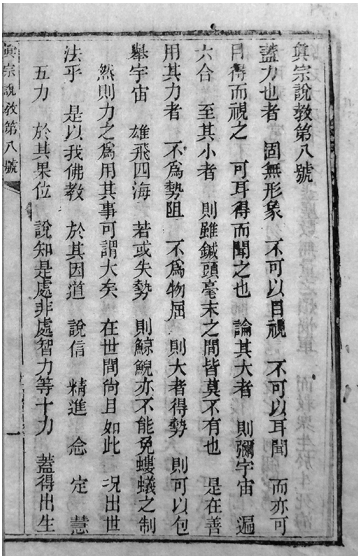
なお、同時期に別院では『日本外史』の出版が行われていた。岳崎「襍志」には同書に関する記述が見られるほか、[36]



真宗說教第一號

成佛道有二種　一曰難行道　二曰易行道　難行道者
謂修六度萬行　以悟法性妙理　行此道甚難矣　故龍樹
菩薩曰　行諸難行久乃可得　易行道者　謂心深信阿彌
陀佛本願之道理　口稱南無阿彌陀佛　佛力往持　卽得
往生淨土　行斯道甚易矣　故龍樹菩薩曰　卽時入必定
傳此易行道　得卽度則龍樹菩薩也　天親菩薩也　在
中華則曇鸞大師也　道綽大師也　善導大師也　在日本
則源信大師也　源空大師也　吾宗祖親鸞大師　相承已
上七祖　以開一宗　名淨土眞宗　今畧言之眞宗　卽所
謂易行道也　是故本宗所傳　異於他宗之旨　不論在家
與出家　不論賢者與不肖者　不禁吃酒　不禁吃肉　惟

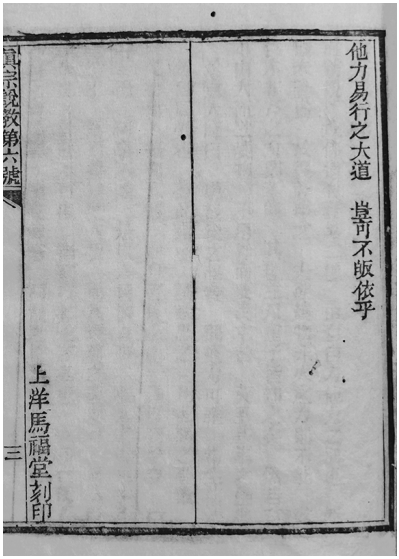
【写真②】「真宗説教」第一号



眞宗說教第八號

盡力也者　固無形象　不可以目視　不可以耳聞　而亦可
目睹而視之　可耳得而聞之也　論其大者　則彌宇宙　遍
六合　至其小者　則雖鍼頭毫末之間皆莫不有也　是在善
用其力者　不爲勢阻　不爲物屈　則大者得勢　則可以包
攝宇宙　雄飛四海　若或失勢　則鯨鯢亦不能免螻蟻之制
然則力之爲用其事可謂大矣　在世間尚且如此　況出世
法乎　是以我佛教　於其因道　說信　精進　念　定　慧
五力　於其果位　說知是處非處智力等十力　盡得出生

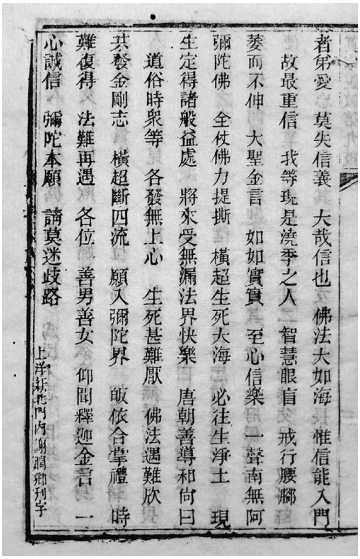
【写真④】「真宗説教」第八号



他力易行之大道　豈可不賅依乎

上洋馬福堂刻印

【写真③】「真宗説教」第六号末尾
刊記「上洋馬福堂刻印」



者第愛　莫失信義　大哉信也　佛法大如海　惟信能入門
故最重信　我等現是澆季之人　智慧眼盲　戒行腰鄉
萎而不伸　大聖金言　如如實實　至心信樂　一聲南無阿
彌陀佛　全仗佛力提撕　橫超生死大海　必往生淨土　現
生定得諸般益處　將來受無漏法界快樂　唐朝善導和尚曰
道俗時衆等　各發無上心　生死甚難厭　佛法遇難欣
共餐金剛志　橫超斷四流　願入彌陀界　皈依合掌禮　時
難復得　法難再遇　各位　善男善女　仰聞釋迦金言　一
心誠信　彌陀本願　請莫迷歧路　上洋新北門內謝潤卿刊字

【写真⑤】 第九号末尾
刊記「上洋新北門内謝潤卿刊字」

前述した『雑録』（白華文庫蔵）には、その出版費用などの詳細が「外史翻刻計算」として、出版費用や清末文人への謝金などが記されている。[57]

明治初期に日本人が上海で出版したものに、吉嗣拝山『骨筆題詠・江南游草』[58]（光緒四年・一八七八）や雑誌『上海商業雑報』[59]（上海商同会、明治十五年）が知られているが、本資料と『日本外史』は同時期に上海別院が出版に関わったものである。

その後、上海別院では明治二十四年（一八九一）に邦人子弟のために設置された開導学堂（小学校）用に教科書が印刷されていた[60]ほか、明治二十七年（一八九四）一月に『仏門月報』[61]（漢文）が、明治四十三年（一九一〇）から明治四十五年（一九一二）にかけて雑誌『上海仏教』（和文）が出版されている。[62]

日清戦争後、東本願寺が中国人子弟の教育を目的とした設置した杭州日文学堂では、堂内に印刷所を設置し教科書を印刷していたほか、『訳林』（伊藤賢道監訳、商務印書館、明治三十四～三十五年）や岡本監輔『大日本中興先覚志』（明治三十四年）が刊行されている。また、『六十年史』（前掲書）によると、廈門教堂では「儒皮仏骨宗論」（漢文）が出版された。一方、金陵東文学堂では一柳知成が雑誌『漢文仏教』を刊行する予定であったが、義和団事件のため中止された。

このほか、光緒二十四年（一八九八・明治三十八）には上海蒙学会によって『蒙学書報』（全十二冊、石印）が刊行されているが、その内『小学格致新編』一巻・『小学理科新編』一巻・『古雄逸話』一巻・『児童笑話』一巻・『家庭雑誌』一巻・『少年世界』一巻は、布教僧の松林孝純が翻訳（漢訳）を行っている。

本資料のあとに出版されたこれらの多くは、近代知識を啓蒙する内容や、日本や世界の時事問題などを収録しているのに対し、本資料は仏教・真宗関係の記事を収録しているのが特徴である。

以上、本資料について見てきたが、本資料は明治初期の中国布教すなわち日本仏教初の海外布教において最も早く出版された刊行物であり、中国人向けの布教活動の一端とくに説教について知ることができる貴重なものであるだけでなく、従来知られている『骨筆題詠・江南游草』（明治十一年頃）や『上海商業雑報』（明治十五年）とともに明治初期に日本人によって上海で刊行されたという点でも貴重である。しかし、これまで本資料について言及した先行研究は殆んどなかった。よって本資料の重要性に鑑み、このたび翻刻を行うこととした。

謝辞　本稿執筆にあたって、白山市立松任図書館・本誓寺前住職故松本梶丸氏・常福寺前住職北方匡氏・早稲田大学社会科学総合学術院教授故島善高氏には、資料の閲覧・撮影等に御高配を賜りました。厚く御礼申し上げます。

注

（1）北方心泉（一八五〇～一九〇五）、加賀国金沢の人、常福寺の第十四世住職。名は祐必のち蒙。号は心泉・雲逝・小雨・月荘・文字禅室・聴松閣・酒肉和尚など。石川舜台の慎憲塾・松本白華の遙及社・翻訳局等で学ぶ。明治十年（一八七七）から十六年（一八八三）まで足掛け六年に亙り清国布教事務掛として上海別院に勤務する。この間、五三七人のべ五三一九首の日本漢詩を収録した兪樾（号曲園）『東瀛詩選』四十巻補遺四巻（明治十六年）の編纂に岸田吟香とともに関わり、清国の文人達と交流を深める。明治三十年（一八九七）、再び渡清し、翌明治三十一年（一八九九）南京に設立された金陵東文学堂の初代堂長をつとめた。一般には、明治を代表する書家の一人で、北派書風を楊守敬とは別にいち早くわが国に紹介した人物として知られる。明治二十三年（一八九〇）、第三回内国勧業博覧会に出品し入賞。

（2）高西賢正編、東本願寺上海別院、一九三七年。

（3）小栗栖香頂（一八三一～一九〇五）は、豊後戸次・妙正寺住職で、八洲または蓮泊と号した。咸宜園の三才子といわれ、弟

の小栗憲一（号布岳）も咸宜園出身であった。維新後、本山を東京に移転することを提唱した。明治六年（一八七三）七月渡清、北京で中国語を学ぶかたわら、日本・清国・印度で仏教三国同盟を結び、キリスト教に対抗すべきであることを説いた。翌年八月帰国。明治九年（一八七六）七月、再渡清し東本願寺上海別院開設に関わる（～十年一月迄）。著作に『真宗教旨』（真宗東派本願寺教育課、一八七六年）・『真言宗大意』（真宗東派本願寺教育課、一八七七年）・『喇嘛教沿革』（石川舜台、一八七七年）・『北京護法論』（私家、一九〇三年）などがある。前掲注2『六十年史』には、香頂の日記「八洲日暦」を鈔録する。なお、妙正寺・永福寺に遺されていた香頂関係資料は、現在大谷大学に所蔵する。

（4）谷了然（一八四四～一九一九）は、加賀小松の来生寺に生まれ、のちに同地の教恩寺に養子に入り住職となる。石川舜台が主宰する金沢の慎憲塾で、笠原研寿や北方心泉とともに学ぶ。上海別院開設に尽力し、同別院初代輪番となり、中国各地を視察した。明治十年（一八七七）には北京教校を開設するも、翌年更迭される。明治三十年（一八九七）、石川舜台の上席参務就任にともない、明治三十一年（一八九八）に中国布教が再開されると、開教事務局長として渡清し、杭州および蘇州日文学堂の設立に尽力した。著書に、『御書立演義』（大谷派本願寺文書掛、一八九九年）がある。谷の「日記」は全九巻あるとされ、前掲注2『六十年史』に「谷了然師日記抜萃」・「谷了然師日記別冊」として鈔録されるほか、槻木瑞生編『アジアにおける日本の軍・学校・宗教関係資料』第四期、「日本佛教団（含基督教）の宣撫工作と大陸」第四巻（龍渓書舎、二〇一二年）に、同日記の筆写本が「滞在支那記」として影印される。

（5）岳崎（岡崎）正鈍（一八三六～一八八六）は、秋田・浄弘寺十世、速證院正桓の三男として生まれた。字は法泉、漱石・悟外・痴羊・酔月楼・秋雲・自笑人等と号し、その居室を自笑観と称した。明治元年（一八六八）、越前国祐善寺に入寺して、同寺十八世を継ぐ。明治十年（一八七七）七月から翌年五月まで、三等説教者兼四等教師として東本願寺上海別院に在勤し説教を行うかたわら、中国人向けに「真宗説教」編纂に従事したほか、同別院内に設立された江蘇教校で日本人留学僧に宗乗（真宗学）を教授する。歿後、法主大谷光勝（厳如）は染筆院号法名を下賜し、大正十二年（一九二三）に嗣講の学階を贈られた。著書に、『真宗要目五十題弁妄』（法蔵館、一八八七年）などがある。前掲注2『六十年史』には、上海別院時代

の漢文日記である「支那在勤襍志」を鈔録し、のちに全文が『真宗史料集成第十一巻　維新期の真宗』（同朋社、一九七五年）に翻刻された。

（6）菊池秀言（一八五五～一九四四）は、安政二年（一八五五）八月十五日、礼徳寺住職遠藤示辯の子に生まれた。江蘇教校および北京（直隷）教校に留学、明治十一年（一八七八）に酒田・浄福寺に養子に入り、菊池姓となった。明治十四年（一八八一）に帰国し、条約改正にあたっては布教権を盛り込むよう岩倉具視や井上馨ら政府要人に陳情した。のち、酒田慈善授産会会長・酒田報恩恵会長をつとめ、藍綬褒章を授与された。昭和十九年（一九四四）十月十四日歿、享年九十歳。漢詩集に『遯庵詩存』（一九四〇年）がある。前掲注2『六十年史』編纂にあたっては、菊池が編輯・発行した『亀崎山浄福寺伝燈列記』（一九三五年）が参考とされた。

（7）『山形大学紀要（人文科学）』第五巻第四号、一九六四年。

（8）日本国際政治学会『国際政治 日本外交史の諸問題Ⅱ』二八号、一九六五年。

（9）上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科国際関係論専攻『コスモポリス』編集委員会『コスモポリス』第七号、二〇一三年。

（10）日本近代仏教史研究会『近代仏教』第二〇号、二〇一三年。

（11）阿部洋編『日中教育文化交流と摩擦』、第一書房、一九八三年。

（12）大正大学『日本仏教教育学研究』第五号、一九九七年。

（13）『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第一〇号、二〇〇〇年。本稿は、劉建雲『中国人の日本語学習史―清末の東文学堂―』（学術出版会、二〇〇五年）に再掲された。

（14）山喜房佛書林、二〇〇三年。

（15）山喜房佛書林、二〇一六年。

（16）法藏館、二〇〇九年。

(17) 法藏館、二〇一六年。
(18) 研文出版、二〇一三年。
(19) 勉誠出版、二〇一六年。
(20) これまで筆者が翻刻した関係資料は次の通りである。
〔白山市立松任図書館白華文庫・松本白華旧蔵資料〕
「白華文庫蔵・小栗栖香頂「水築小相伝」について」(『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』第四六集、二〇一六年)。
「白華文庫蔵・平野五岳「五岳道人 古竹邨舎詩鈔」について」(二松学舎大学東アジア学術総合研究所日本漢文教育研究推進室『日本漢文学研究』第一二号、二〇一七年)。
〔常福寺・北方心泉旧蔵資料〕
「常福寺所蔵・三宅真軒撰『文字禅室必備書目』について」(二松学舎大学二一世紀COEプログラム『日本漢文学研究』第三号、二〇〇八年)。
「常福寺所蔵・「圓山大迂／圓山惇一書翰(北方心泉宛)」について」(二松学舎大学二一世紀COEプログラム『日本漢文学研究』第四号、二〇〇九年)。
「資料翻刻 常福寺所蔵・「岸田吟香書翰(北方心泉宛)」について」(関西大学文化交渉学教育研究拠点(ICIS)『東アジア文化交渉研究』第三号、二〇一〇年)。
「資料紹介 常福寺蔵・清国書籍販売目録三種について―『増補抱芳閣書目』・『酔六堂発兌書籍価目』・『湖北官書処書目』―」(二松学舎大学東アジア学術総合研究所日本漢文教育推進室『日本漢文学研究』第一三号、二〇一八年)。
〔上海図書館蔵書楼所蔵資料〕
「〈翻刻〉上海別院「河崎輪番日記」(写本)について」(大谷大学真宗総合研究所『大谷大学真宗総合研究所紀要』第三六号、二〇一九年)。

※論集には要旨のみを収録し、翻刻は左記のＵＲＬを参照されたい。
https://otani.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=7695&item_no=1&page_id=13&block_id=28

(21) 宮原節庵（一八〇六～一八八五）は、文化三年（一八〇六）生、名は龍、通称は謙三（蔵）、字は士淵、節庵・潜叟・易安・易庵・栗餘・池南・栗村と号す。備後の人。頼山陽に学び、のち昌平黌に学ぶ。天保十二年（一八四一）七月、京都御池車屋町に塾を開く。著書に『節庵遺稿』四巻二冊（宮原六之助、一九〇一年）がある。

(22) 劉冷窓（一八二五～一八七〇）は、文政八年（一八二五）生、名は昇、通称は三郎、字は君平、号は冷窓、豊後の人、廣瀬淡窓に入門、劉石秋（一七九六～一八六九）の長男。

(23) 廣瀬旭荘（一八〇七～一八六三）、名は謙、通称は謙吉、字は吉甫、旭荘・梅暾・秋村（邨）と号す。豊後日田の人。文久三年（一八六三）歿。享年五十七歳。廣瀬淡窓の弟。

(24) 小栗憲一（一八三四～一九一五）は、元園のち布岳と号した。豊後・妙正寺に生まれ、兄の小栗栖香頂と同じく咸宜園に学ぶ。幕末維新期にかけて、長崎などで教会に諜者を潜入させるなどの対キリスト教活動に従事した。維新後は宗名恢復運動（明治四年）に参加し、弾正台・監部・宮内省・教部省・大蔵省で勤務したのちに、真宗京都中学校長や善教寺住職をつとめた。明治十一年（一八七八）に琉球を、明治三十一年（一八九八）に韓国を訪れている。著書に、『豊絵詩史』（西村七兵衛、一八八四年）・『真宗興隆縁起』（哲学書院、一八九二年）・『小栗栖香頂略伝』（明治舘、一九〇七年）などがある。

(25) 玉川吟社について述べたものは次の通りである。
玉川堂主人・斎藤彰「玉川茶亭と玉川吟社」（『書道研究』五〇号、一九九二年）。
山本佐貫「咸宜園門人たちの詩社「玉川吟社」に関する考察」（『大分県地方史』第一七九号、大分県地方史研究会、二〇〇〇年）。
川邉雄大・町泉寿郎「松本白華と玉川吟社の人々」（『日本漢文学研究』第二号、二松学舎大学二一世紀COEプログラム、

二〇〇七年）。

白華は玉川吟社のほか、塡詞の結社である香草吟社の社中でもあった。香草吟社については本誓寺資料をもとに書かれた、神田喜一郎『日本における中国文学Ⅰ』（二玄社、一九六五年）に詳しい。神田は台北帝大教授の時に、本誓寺の資料を見たのだろう。

(26) 白華ら東本願寺一行が海外視察にいたる一聯の経緯については、川邉雄大・町泉寿郎「松本白華と玉川吟社の人々」（前掲注25）を参照されたい。

(27) 編集松任市中央図書館、漢籍指導大沼晴暉、一九八八年。

(28) 本誓寺蔵。『松本白華航海録』翻刻に以下のものがある。
加越能史談会『加賀文化』第二号・第四号。
柏原祐泉編『真宗史料集成』第十一巻（前掲注5）。
北川伸三「松本白華航海録（抄）」（『郷土と文化』第一五号～一八号、松任郷土研究会編、松任市教育委員会、一九八八年～一九九二年）。

(29) 大谷大学国史学会、昭和初期。

(30) 大谷大学国史研究会、一九三三年。

(31) 大谷大学国史研究会、一九三四年。

(32) 常盤大定編輯『明治仏教全集』第八巻（春陽堂、一九三五年）。

(33) 『明治仏教全集』第八巻（前掲注32）。

(34) 幕末維新期に活躍した主な咸宜園出身の真宗僧は次の通りである。
〔東本願寺〕
末広雲華（豊後・満徳寺のち豊前・正行寺、高倉学寮講師）・釈徳令（筑後八女・光善寺、修文館を主宰）・平野五岳（豊

後日田・専念寺）・唐川即定（咸宜園塾主、真宗大学教授）・小栗栖香頂（豊後戸次・妙正寺、中国布教）・小栗憲一（同、真宗中学校長・のち善教寺住職、琉球・朝鮮布教、香頂の弟）・関信三（三河一色・安休寺、猶龍のち安藤劉太郎、白華とともに海外視察を行う）・雲英晃耀（同寺、高倉学寮擬講、関信三の兄）・渡辺徹鑒（三河若林・浄照寺、上海別院輪番）・伏成（伊豆三島・成真寺、護法場寮長）・奥村圓心（肥前唐津・高徳寺、朝鮮・千島布教）、田原法水（豊後大野・常満寺のち那覇・真教寺、琉球布教）、武宮現真（肥前・真光寺、琉球布教に尽力）・松本白華（加賀松任・本誓寺、大坂旭荘塾、海外視察・上海別院輪番）白川慈孝（劉石舟塾・大坂旭荘塾、本山改正掛）。

〔西本願寺〕

月性（周防大島、妙円寺、勤王僧、咸宜園客席生）・良厳（越前・唯宝寺、のち石丸八郎、教部省十一等出仕兼中講義）・赤松連城（周防徳山・徳応寺、維新後渡欧）・普寂（肥後鹿本・明照寺、のち清浦奎吾、第二三代内閣総理大臣）。

(35) 「支那開宗見込」は、前掲注14『清末仏教の研究会』に一部翻刻する。

(36) 『西南記伝』上巻一附録（黒龍会、一九〇八年）、六六頁。

(37) 香頂が寺島を訪問したときの顛末が『令知会雑誌』一九号（一八八五年十月）に掲載されており、これによると、寛政年間に渡来したポルトガル人宣教師の例を挙げて、香頂に対して清国での布教活動について激励している。

(38) 本事件については、拙稿「明治期の琉球における真宗法難事件に関する一考察―善教寺資料を中心に」（法政大学沖縄文化研究所『沖縄文化研究』第四一号、二〇一五年）等を参照されたい。

(39) 当時、東本願寺の海外布教を推進していた石川舜台は、「懐旧録」（前掲注2『六十年史』収録）で、帰国後失脚していた江藤に替わって、大久保に近づき海外布教の意義をロシアに対する防備に有用であると説き理解を得たと述べている。

わしらの洋行から帰つたのが明治七年（※六年）ぢや。帰つては来たがそれに大変世話になつた三條実美・江藤新平の諸卿は、内閣の騒動で退いて仕舞つた。そこで江藤の代りに大久保利通に話し込んで、これから先は、日本ばかりにゐると外教が入るばかりぢや、そこでこれは攻むるを以て防禦とせねばならぬ。その手初めは隣国露西亜からする。露西

亜が一番いかん。そのギリシヤ教のお祭をするあんばいが仏教によく似てをる。それに法王が先方の皇帝ぢや。これは最も恐るべきものである。で、これからやつて仕舞はんならん（以下略）

(40) 「上申書」（草稿、常福寺蔵）。本資料は拙著『東本願寺中国布教の研究』（前掲注18）に全文を翻刻する。

(41) 前掲注4「谷了然日記」。

(42) なかには、ある英国人の日本人妻から「タビタビユウレイガデ、コマリマス。サンブキヤウヨミテクダサレ云々」（『令知会雑誌』第一八号、一八八五年九月）との手紙が送られてきたので、布教僧の松ヶ江賢哲が読経を行ったこともあった。

(43) 前掲注2『六十年史』。

(44) 「河崎輪番日記」（前掲注20）には、清末文人の名前がほとんど見られない。これは輪番日記という公的性格により、彼らとの交流を記録しなかったのか、あるいはまだ海上派との関係が構築できていなかったのか、この点については今後の課題である。

(45) 前掲注5。

(46) 大倉謹吾（一八四五～一八九九）。弘化二年（一八四五）に医師・大倉良菴の子として越後に生まれた。名は行、字は顧言、通称は謹吾、雨村または鉄農半仙と号した。明治五年（一八七二、一説に明治八・一八七二年）に上海領事館に赴任し、明治十九年（一八八六）五月に帰国、明治二十三年（一八九〇）に退官した。帰国後に出版された著書『雨邨画冊』（楽善堂、一八八八年）は、封面は徐三庚の手によるもので、奥付に「著作者　長崎県平民　大倉謹吾　東京四谷区南伊賀町十壱番地」とある。なお、「岸田吟香書翰」（一八八六年七月七日、前掲注20「資料翻刻 常福寺所蔵・「岸田吟香書翰（北方心泉宛）」について」所収）には、上海の近況として「大倉雨村画伯者帰朝致候。胡公寿、張子祥者死矣。曲園翁者無事也。」とある。

(47) 内海吉堂（一八四九～一九二三）は、名は復、字は士綱、号は兼霞楊柳、越前敦賀の人。明治十年（一八七七）六月から明治十五年（一八八二）一月まで清国に滞在した。漢詩集に『吉堂遺稿』（内海達太郎、一九二五年）がある。

(48) 岳崎「襍志」（前掲注5）、（一八七八年三月十日）「本日因無本邦人参詣無説教。西京鳩居堂安兵衛・画工小石至」。

(49) 前掲注48。

鳩居堂から清国に派遣された職工について、当時以下のような新聞記事があり、恐らく安兵衛のことを指すと思われる。

有名なる西京の鳩居堂熊谷久兵衛ハ至て家業を勉強し、昨年以来支那の徽州・湖州に人を遣ハシ、筆墨の工事を学ばしめしが、其の秘蘊を伝へて竟に博覧場にて一等賞牌をも賜ハりたるハ実に栄誉と云ふ可シ。其の製なる大小各種の筆を試みしに其の毫ハ頸軟を雑へ如何にも精妙にて決して支那製に譲らず。（以下省略）（『朝野新聞』一八七七年十一月二十四日）

西京の熊谷久兵衛氏（鳩居堂）ハ久しく製墨に意を用ひ、去明治八年に其の業に巧みなる職工二名を支那徽州製墨所へ遣ハシ、同十年卒業帰店せしに付、其の法を以て製したる墨数種を内国博覧会に出品し、龍紋の賞牌を得たるハ実に同氏が多年の功にて、又此たび宮内省より図形百馬の図其外六種の御用墨製造仰付られしといふ（以下略）（『朝野新聞』一八七九年二月二十三日）

(50) 吉嗣拝山（一八四六～一九一五）。太宰府の人、幼名は寛一、通称は達太郎、名を達、字を士辞、拝山と号す。室名は古香書屋。元治元年（一八六四）咸宜園に入門、慶応三年（一八六七）中西耕石に入門、明治二年（一八六九）大蔵省勤務。明治四年（一八七一）、太政官国史編輯局に勤務していたが、災害により右腕を失う。明治十一年（一八七八）二月から六月にかけて清国に滞在しており、『骨筆題詠』には当時交流した海上派の漢詩文のほか、白華（松西塘）の詩「骨筆歌毎句押韵拝山仁兄吟壇正」や心泉の序文を収録する。

拝山については、長尾直茂『吉嗣拝山年譜考證』（勉誠出版、二〇一五年）に詳しい。

(51) 島善高「副島種臣と銭子琴―明治初年、日中文化交流史の一コマ―」（公益財団法人大倉精神文化研究所『大倉山論集』第六五輯、二〇一九年）によると、白華が毛祥麟および斉玉渓に贈った『西塘詩稿本』のうちの一本と思われるものが蘇州図書館に所蔵されている（筆者未見）。

(52) 町泉寿郎「松本白華―欧州・中国を見た人の沈黙」（小川原正道編『近代日本の仏教者―アジア体験と思想の変容』、慶應義塾大学出版社、二〇一〇年）では、白華の晩年に刊行された『白華餘事』では、長三洲・小栗憲一ら咸宜園や宗門の同門による批点が尊重されている点を指摘している。

(53) 渡辺徹鑒（一八四〇～一九〇七、号蘭谷）は、天保十一年（一八四〇）十一月十五日、三河国碧海郡桜井村法行寺に生まれた。十九歳で咸宜園に入門し六年間学び都講となった。二十七歳の時、若林浄照寺に入り、第十六世の住職となり、私塾を開いて子弟の教育にあたる。明治元年（一八六八）、南條神興講に師事し仏典を学ぶ。明治十一年（一八七八）八月から明治十二年（一八七九）九月三日まで上海別院の輪番をつとめた。前掲注2『六十年史』四二頁には、「上海別院兼務を命ぜられた渡辺徹鑒師は、夫婦及び長子徹到の全家三名で上海に渡航就任し、別院の会計の整理を為した（浄照寺過去帳）」とあり、同書四三頁には「渡辺徹鑒師は、十二年八月、実弟織田受法危篤の報に接し、直ちに帰朝したが、途中神戸で妻女が頓死したといふ（浄照寺過去帳）」との記述がある。明治三十年（一八九七）、本山第一回議制局の親撰賛衆となる。明治四十年（一九〇七）四月二十四日歿、享年六十八歳。漢詩集に、『遠明堂詩鈔』二巻（渡辺徹鑒（蘭谷）、一八九一年）がある。

(54) 細野燕台「北方心泉先生に就て―十月号所載北大路氏書道記事に関連して―」（星岡窯研究所『星岡』第三巻第六三号、一九三五年十二月号）によると、「（心泉は）自分の家にあるものなど殆ど支那風で、着物も支那服を着たりして、其時分としては餘程支那かぶれしたものでありました。」とある。

(55) 「余「真宗説教」第六号脱稿」（一八七七年八月十八日）。
「余「真宗説教」第七号脱稿」（同年九月四日）。
「「説教」草稿第八号脱稿」（同年十月一日）。
「「真宗説教」第九号、松本白華殿草成以求刪補于余成賛而直啓上」（一八七八年一月七日）。
十月十七日「薄暮銭子琴到余前、城老因輪的之請莅其席。蓋別院有外史翻刻之挙件也」。
十二月十一日「銭子琴先生（中略）外史評点及毛対山序文成」。

（57）整理番号２０６「〔雑録〕〔明治初〕写（白華）」（※表題、縦一八×横一二）。本資料は、前掲注27『松任本誓寺　白華文庫目録』に収録せず。

外史翻刻計算

（※欄外冒頭　預備／八百五十一円九十八銭／六厘四毛）

一　四拾五円　斉玉谿・毛対山／銭子琴・曹叔培等へ／依頼ニ付諸入費

内訳

弐拾円　斉玉谿序文

拾円　毛対山品物贈ル

拾五円　宴会等費張鼎功へ貸ス

一　六円九拾八銭六厘四毛　判木（ママ）誤刻見本／幷ニカバン崖辺遣ス

○白尾・浄川へハ／外史一部ツヽ遣ス

一　五拾円　銭子琴・曹叔培雇薪水／費遣ス

但十二月渡置クト雖モ勉強為致度ニ／付預置分拾円也此金五円渡ス

一　五拾円　銭子琴・曹叔培／薪水費

右二月中ニ相渡候約定尤外史出来ゆノ／周旋都テ此中ニ籠候約定故五拾円預置／九月拾六日応接済ニテ渡ス

一　二十九円三角六分四厘　第二巻

一　廿七円六角五分　第三巻　第四巻

一　五拾円〇〇四分　第四五両巻

一　五拾円〇六角　第六七巻

一　五拾三円壱角五分　第八九十巻

一　五拾五円七角六分　　第十一十二巻
一　四十六元二角　　第十三四巻
一　五十六元　　第十五六巻
一　五十円　　第十七八巻ノ先渡
〆五百七拾円〇七拾五銭〇四毛也
預備八百五拾壱円九拾八銭六厘四毛／之内ニテ〆高引残リ
弐百八拾壱円弐拾三銭六厘

(58) 本書は光緒四年の清末文人や心泉の序跋を掲載し、末尾に「上洋馬馥堂刻印」とある。この馬馥堂は、本資料「真宗説教」の刊記にある馬福堂と同一の版元と思われ、拝山が上海滞在中（一八七八年二月～六月）に作らせたものであろう。東京大学総合図書館所蔵本は「光緒丁亥（光緒十三年・一八八七・明治二十）春仲遊次大宰府往訪　拝山詞兄談次示骨筆幷索第句為賦長古以応雅属並普　政之」を収録するが、無窮会所蔵本ではこの部分を収録しない。さらに、東大本は該当箇所のみ字体が異なるほか、無窮会本と比べて全体的に刷りの状態が良くないことから、後修による増補本（明治二十年以降）である。

(59) 蛯原八郎『海外邦字新聞雑誌史　付海外邦人外字新聞雑誌史』（学而書院、一九三六年。一九八〇年、名著普及会より再版）二七五頁に、以下の記述がある。

清国に於ける最初の邦字雑誌は、明治十五年七月に岡正康が創刊した月刊「上海商業雑報」であらうと思ふ。四六倍判、約三十頁、発行所は英租界の三井物産会社内上海商同会でつた。（中略）江南哲夫も創立者の一人であつた。当時の内務省の調査に拠ると、此雑誌は明治十六年十月発行の第十一号限り廃刊したものらしい。我明治文庫には、第二号から其終刊第十一号までが保存されてゐる。

(60) 前掲注2『六十年史』、七一頁。

(61) 前掲注59『海外邦字新聞雑誌史』二七〇頁に、『自由新聞』第七七〇号（一八九四年二月二日発行）からの引用として、以下

の記述がある。

（前略）又上海虹口西東本願寺別院に於て、今度「佛門日報」と題する新聞を発行せり。主筆は院主佐野則吾氏にして、初刊千部を印刷して広く清国各地に配布し、専ら支那人を済度する目的なる由。

（62）西本願寺では、法主を引退した大谷光瑞が大正十年（一九二一）、上海に別荘「無憂園」を構えた。翌大正十一年（一九二二）には「獅子吼会」を結成し邦人向けに講演などを行ったほか、同年に雑誌『大乗』（西本願寺、一九四三年廃刊）を刊行した。

凡例

一、漢字表記については、原則として現在通行の印刷字体を用いた。
一、判読不能の箇所については、□で表記し、推測される文字を（　）で補記した。
一、行数と文字数については、原資料に従った。
一、丁数については、原資料に従った。

翻刻

真宗説教

（表紙）

真宗説教第一号

成佛道有二種　一曰難行道　二曰易行道　難行道者
謂修六度萬行　以悟法性妙理　行此道甚難矣　故龍樹
菩薩曰　行諸難行久乃可得　易行道者　謂心深信阿弥
陀佛本願之道理　口称南無阿弥陀佛　佛力住持　即得
往生浄土　行斯道甚易矣　故龍樹菩薩曰　即時入必定
伝此易行道　得即度則龍樹菩薩也　天親菩薩也　在

中華則曇鸞大師也　道綽大師也　善導大師也　在日本則源信大師也　源空大師也　吾宗祖親鸞大師　相承已上七祖　以開一宗　名浄土真宗　今畧言之真宗　即所謂易行道也　是故本宗所伝　異於他宗之旨　不論在家与出家　不論賢者与不肖者　不禁吃酒　不禁吃肉　惟

（一表）

貴　惟賤　不管寵妻与愛子　不管条桑獲稲　与相貿易于市井関津　其成佛之業因　唯深信阿弥陀佛本願之道理而已　故常称南無阿弥陀佛　応報大悲済度之恩　能如此而終生履行孝悌忠信　為本宗之規律　即是大無量寿経所説也　経言　言行忠信　表裏相応　又言行択其善者　勤而行之　蓋人當敬事孝養於君父　行無踰　五尺之童尚知其宜然　何以二毛之碩学　半已之長老　不知履行之者多　豈不可謂咄咄怪事乎　世人試思之　其知宜孝養敬事者　即是自己本然之良心也　然知之而忍不行之者何　只是私慾隔断　自害良心也　孟子所謂其旦画所為有梏亡之矣　梏之反覆者也　良心萌孽偶発見至微而念念事事展転反覆梏亡之遂至其好悪　与人遠矣

（一裏）

故釈迦牟尼佛警覚之言　父母教誨　瞋目怒膺　言令不和　違戻反逆　譬如怨家　不如無子　又言　佞諂不忠　巧言諛媚　疾賢謗善　陷入怨枉　嗚吁何弗思之甚矣　一自反　則其善不善　可以不言而諭　世人且思量如此不善　計之不一而足　不啻今世旦夕為之　無始已来積累者　不可勝計　乃所以死後受地獄之苦悩也

苟知此理　則不可不勉去不善而赴善　然業道如秤　重者先牽　今而後唯善是為　而奈何従前所造之地獄之業因過多　不断除之　則不能免地獄之苦悩　是其所以捨家棄欲　絶妻子之恩愛　修六度萬行之難也　然人生一生応分之事　猶且或不能履行之　況修六度萬行乎　是以阿弥陀佛　大慈大悲　招喚衆生曰　汝一心正念直皈

（二表）

依我　以當済度　又誓曰　若不生者　不取正覚　故一信阿弥陀佛本願之道理　則即以大悲光明　摂護此人令住不退転位　依佛力住持　罪悪消滅　必得往生浄土受快楽　是故終生称南無阿弥陀佛　報大悲済度之恩

且須履行本宗之規則也　孟子曰　学問之道無他求其放心而已学問者何　念念事事　問之吾性也　学之吾性也

非謂如彼汲汲然於記誦訓話　以求功名利達之具　懸空無実　務於外遺於内　甚至破産亡家　画于茅　宵索綯　紛紛雑雑之間　接於一事　発於一念　而反躬自省非是不尽臣民之務乎　非是忘却子弟之分乎　非是交友無信乎　実践躬行之　農学之得為農　商賈学之得為商賈　以出則忠　以入則孝　是之謂学問　所謂工夫萌孽

（二裏）

於是乎生生不停　則与人同好悪之功夫蓋在此耳　而此工夫是釈迦牟尼佛大無量寿経所説也　曰　修己潔体洗除心垢　修己　謂於一念一事　自反以正己　彼所謂求放心也　既正自己之意念　即心体得正焉　此謂潔体　能如是而念念不忘　則洗除心垢　始可以到言行忠信表裏相応之地位矣　而其下手力行　去邪得正之工夫

只是修己二字耳　詳説之則択其善者勤而行之也　如此実是軽軽易易而却是実在工夫　随手去邪得正之大道也　豈不易行道乎願世人勉旃

（三表）

※空白

（三裏）

真宗説教第二号

前号説成佛道有難易二種　然猶未説尽　故逐次申説之
一則要布施持戒忍辱精進禅定智恵　総修得之　而一
毫勿遣　煩悩惑業　総断滅之　而莫使一糸牽掛　終以
悟本有之佛性　然唯是自力　無他力持　故其間苦行不
可名状　蓋所以難行道也　一則以信佛因縁　願生浄土
乗阿弥陀佛願力　便得往生浄土　佛力住持　即住不
退転位　勿要一毫自力之功　蓋所以易行道也　故龍樹
菩薩設譬説明之曰　如世間道有難有易　陸道歩行則苦
水道乗船則楽　夫悕望私利　只図肥身　機変之巧無
所不到　騙瞞之事無所不為　此謂貪欲　遇逆境　或偶
失便宜　則益怒鬪争　勉強忍之　卻胸中如裂　此謂瞋

（一表）

恚　此皆是地獄之業根也　然竟不知去悪赴善　只懵懵
瞳瞳做去　此之謂愚癡　已上三者此謂三毒煩悩　且夕

作此数多煩悩即此悪因而不停　已有悪因　豈得無悪果乎　所以来世不免苦悩也　且夫人寿有限　不可期之十百歳　今現壮且健　然気息一絶　則難免一死　況其期不可豫知　実是一呼一吸蜉蝣之寄焉而已　念及於此号天叫地　不可不求一条活路　乃歩行於難行陸道　嶮而遠矣　則智恵之眼目不可不明　萬行之腰脚不可不堅　衆善之資糧不可不多　然今時衆生　智目則盲　行足則蹇　資乏　糧空　欲行此道　雖一歩難進也必矣　易行之水道於是乎可皈依　阿弥陀佛本願　猶苦海之慈航也　不要智目　不要行足　不要自力衆善之資糧　一乗

（二裏）

此願船　必當到涅槃之彼岸矣　譬如鉄石世之重物也装之船内則可航大洋　世人生生世世所造之罪悪雖重一信阿弥陀佛本願之道理　仗佛力住持　往生浄土之業事成於一念之頃　即可得渡苦海生浄土　豈非易行之至極矣哉　信此道理而不疑　此謂獲得他力信心　此信心即是往生浄土之真恩也　已獲得信心　唯能常称南無阿弥陀佛　応報大悲済度之恩也　已土所説是本宗安心

若本宗規則　則経所謂一心制意端身正行也　言行忠信
表裏相応也　即世間所謂履行孝悌忠信也　蓋是人生分
内之事　而断断不可闕者也　宗規其豈可不守乎

（二表）

※空白

（二裏）

真宗説教第三号

曇鸞大師曰　易行道者　謂以信佛因縁　願生浄土　乗
佛願力　便得往生彼清浄土　佛力住持　即入大乗正定
之聚　言信阿弥陀佛本願之道理　即時住不退転位　必
當往生浄土也　信佛因縁之言　蓋是易行道之指帰矣
世人試思之　有因必有果　積善餘慶　積悪餘殃　古之
格言　積善而成名　悪積而亡身　皆是因果之理　作忠
信節孝之因　則有旌表恩典之果　作不軌犯法之因　則
有呵責刑戮之果　如此是不待智者而知也　世人且思量
　履行孝悌忠信　是人生分内之事　然其事尚且不能履
行之　何有善根在　況於転迷開悟之大事乎　然所以不
能修善根者何　被貪欲与瞋恚与愚癡及一切無量煩悩隔

（一表）

断也　而此煩悩即是堕獄之業因　然則已無有成佛之縁
　卻有堕獄之因　而不可勝計　則獲悪果也必矣　可不
静思而猛省而悔過遷善乎　釈迦牟尼佛言　大命将終悔
懼交至　噫夫積悪餘殃之道理　報応不爽　至無可奈何
之際　此時雖悔則已晩矣　思念一及於此　即急速可皈
依阿弥陀佛之願力　阿弥陀佛之本願　即是前号所謂苦
海之慈航迷津之寶筏也　縦令彼貪瞋等罪悪深重　深信
此本願之道理　得佛力住持即時住不退転位矣　生此信
心　偏是佛力所然　故言他力信心　夫此信心之因即感
無上涅槃之果　無上涅槃者　謂永離生死之迷　開与阿
弥陀佛一様真如法性之妙果　蓋積善餘慶之至極最大者
也　因果之道理其容疑乎　阿弥陀佛之願力如此可能済

（一裏）

度衆生　當信而不疑歓喜奉行　若疑而不信則不能済度
之　譬如雖鉄石重物搭船可以航大洋　然不去搭之不能
渡海　故龍樹菩薩曰　若人種善根　疑則華不開　信心
清浄者　華開則見佛　実是以信佛因縁得往生浄土也　非

無因他因有也　世人若知此因果之道理　則何不慮来生
感果之如何　而懵懵瞳瞳做去哉　須急速皈依易行大道
　深信阿弥陀佛本願之道理　念南無阿弥陀佛也　其能
如此是名入正定聚　正定聚者是不退転位也　已入正定
聚之位　則須守本宗規則　規則者何非持戒律也　非仮
粧外貌也　忠于君　孝于親　友十兄弟　信于朋友　即
全仁義礼智也　此是釈迦牟尼佛之遺誡　而古聖人所以
教人者也　固人世応分之事也　然則能履行此規則　斯
勿愧以為人　須称南無阿弥陀佛報大悲済度之恩

（二表）

真宗説教第四号

人之所以異於禽獣者何　其性虚霊不昧　居仁由義　謂
之人　此謂萬物之霊　若只有知覚運動　而不知仁義礼
智　則与禽獣何異　人其欲為人歟　欲為禽獣歟　世人
且思量　為人為禽獣　其権非他人操之　就是自己操之
也　然誰願為禽獣者　但不忠于君　不孝于親　唯悪是
作　唯利是図　日用常行之間　詭計百出　迭相呑噬

（二裏）

仁義礼讓則一毫無有　此等人直謂之禽獸也可　是故釈迦牟尼佛　憫世之多禽獸也　以一言喚醒之　言択其善者□(勤カ)而行之　夫善有二　曰世間善　曰出世間善　択世間善而行之　則可以為人　択出世間善而行之　則可以成佛　你欲堕地獄受苦難歟　欲生浄土享快楽歟　世人

（一表）

且思量　堕地獄生浄土　其権非他人操之　就是自己操之也　造地獄者誰　自己造也　臣欺其君　子欺其父　兄弟夫婦朋友之間　交相欺誑転相尅賊　自昧本善之性　徒逞人欲之私　此種念頭　皆是地獄之業根也　譬如国家設有牢獄　世無作悪犯法之人　牢獄亦無所用　則造牢獄者　非悪人而誰　但其顕著於身之罪悪　則国法得而罰之　其隠匿於心之罪悪　国法所不及罰者　則有地獄得而罰之　無量永刦不能脱苦難　世人且思量　誰能造浄土　六度萬行即是成佛之行也　然衆生無始已来所造之罪悪　無由消釈　何能更修得六度萬行　幸頼阿弥陀佛発大慈悲於億萬載永刦前　発願修行　以荘厳浄土　且成就名号曰南無阿弥陀佛　此名号即是諸善萬行

（一裏）

之総体也　是故深信此本願之道理　念南無阿弥陀佛
則其理与修六度萬行同一也　罪悪自然消釈　来世必生
浄土成佛　如有人能全仁義礼智則為人　否則即為禽獣
矣　深信此本願称此佛名　即大悲光明摂護此人　故當
往生極楽浄土　若反唯悪是作　必當堕地獄矣　乃世間
道与出世間道　其理是一般而所謂出世間道　即信本願
念佛名　此是本宗安心　其世間道　即全仁義礼智　此
是本宗規則也　誰願為禽獣　誰願堕地獄乎　履行本宗
規則　今世以成人　決定本宗安心　来世以成佛　豈不
快乎　我真宗之教法蓋如此　世人将謂　日日有事　旦
夕汲汲　不遑慮来世之事　則是自暴自棄　与人無于者
也　釈迦牟尼佛有言　愛欲栄華不可常保　若夫金楼鏤

（二表）

珠玉　几席列八珍　春花秋月玩賞有餘　王侯之貴亦不
羨　然庸庸碌碌不知不覚忘却老之将至　一旦攬鏡自照
　不幾訝白髪翁何処来乎　況其中不免遇有疾病　則佳
肴不甘　羅衾不軽　耳目手足失其司　智慮心思闕其用

即有良医妙術　或命数已終　即難免一死　則一生歓
楽之事　総是成空　由此観之　何苦不皈依佛力　安立
易行大道　而自諉不遑哉　況日用常行之事　無如於信
本願念佛名　而信本願念佛名　則不能邪曲於日用常行
之事　誰得謂日日有事　不遑孝于親　不遑忠于君　将
日日所有之事　可以為禽獣之業　可以為人之行　与皈
佛力而生浄土　反之堕獄　総是你自己作主矣　択其善
者勤而行之其此之謂也　然則日用常行反観之已　率虚
（二裏）
霊之性　全仁義礼智　則可謂萬物之霊　□（深カ）信阿弥陀佛
本願之道理念南無阿弥陀佛　即可謂住正定聚之人　而
此二者是本宗之安心及規則也　夫為人歟　為禽獣歟
往生極楽浄土歟　堕在地獄受苦悩歟　世人有心　自去
思量可也
（三表）
※空白
（三裏）
真宗説教第五号

蓋人也者　萬物之霊也　軽視此生　而自暴自棄　不甚可哀哉　凡人生日用之事　言乎日　莫大於饑渇　故式飲式食以備之　言乎歳　莫大於寒暑　故喪葛以備炎凉　営室以禦風雨　如徹彼桑土綢繆牖戸者是也　能為之備則無凍餓之憂　而言乎一世　則莫大於死生　未知生焉知死　人既受此生　豈能無死　世人能知衣食以備凍餓　而養生而不知為死後之備何哉　如夫朝歓暮楽　安富尊栄　承意旨　供色笑　惟動惟止　而無有一毫遺憾然只是一世之富貴而已　気息若一絶　則妻帑也　財寶也　平生之依憑者　一件不能携帯　則冥冥幽闇裏　只一已行焉而已　豈凍餓之比乎　一念於此　則何萬物之

（二表）

霊而甘心暴棄不為之備乎　然此是転迷開悟之大事　仮令畢生深思　雖殫精竭慮　無由得登進之路　則入其門者或寡矣　故只須深皈依阿弥陀佛之願力　則得従入之途　如行大路然　如何是願　平坦無礙　不要智恵　不要持戒　仮令罪悪深重　一心皈命阿弥陀佛　即時令住不退転位　決定往生極楽浄土也　即是前数号所説之易

行道者也　是故深信此本願之道理　常念南無阿弥陀佛
　応報大悲済度之恩　其能如此則来世之備已成矣　欲
知来世因　今生作者是　而来世之備已成　則非前日之
愚蒙也　蓋是佛智所然　故既住不退転位　則不可不守
本宗之規則　宜常存孝悌忠信之字於心頭而勿遺　詩云
　哀哀父母　生我労劬　若無父母　何以成此身軀　父
　　（二裏）
母何等劬労　養成我一個人　宜温清定省竭力奉事也
在斯世　享太平之福　無盗賊之虞　安居楽業　得自由
於世間者　是誰功徳
皇上在焉　定律令以張綱維　設官吏以施治化　故釈迦
牟尼佛有言　若無帝王　一日之中　萬姓荒乱　相残害
　則吾人受
皇上保庇　如此其大也　忘却洪恩　尚可謂之人乎　故
為臣當作忠臣　為民當作良民　切勿作犯法之事　常思
有益於国家　如此則或可報保庇之恩于萬一也　其他夫
婦兄弟朋友之間　自応各尽其道　以上四字是人生要緊
之事　断断不可闕者也　而本宗之規則　亦不外乎此矣

世人或謂　斯言実為然　然至行之　人人不能如此

（二表）

則如何吾独能為　噫吁何謬妄一至此乎　惑亦甚矣　你且謂吾四隣皆是貧　吾家勿富貴乎　謂鄰家主人病而絶食　吾亦絶食乎　其恣已則毫無顧忌　而其為善則欲俟諸後人何哉　你不曾読中庸乎　曰戒慎　曰恐懼　曰慎其独　又不曾読詩乎　相在爾室　尚不愧於屋漏　然謂此是君子所為　非吾人所企及　即是自暴自棄　吾亦何言　但今時世人　粗識之無　高談孔孟　以読書為文過之資　籍儒術為欺人之具　則雖動墨横錦　咳唾成珠及考其所為　不啻郷愿　乃聖賢徒為弄具　経典借作梯栄　所謂道者　徒逋啜之道也　不亦墜緒茫茫乎　悲夫

則如此非孔孟之罪人而何哉　吾佛有言　心口各異言念無実　豈不可慎乎

（二裏）

真宗説教第六号

前号説成佛道有難行易行二種　今當闡明難易之異　夫所證佛果者一而已　何為致修道有難易之差耶　謂由有

他力自力之異也　曇鸞大師曰　愚哉後之学者　聞他力可乗　當生信心　勿自局分也　凡能勝物者謂之力　火能焼物　火之力也　水能潤物　水之力也　発心修行積功於三祇　二智圓満　成果於三徳　佛法之力也　然利智精進人　宜以自己之力修之　今時衆生　雖偶欲猛進修此道　心猿意馬跳而不止　内有六識　外有六境眼喜色　耳慕声　口貪味之類　晏然処此　放而不反縱令尽千年寿　如獼猴之情　冥頑不霊　無由入于佛界蓋煩悩力強　而善根力弱也　其自力綿薄固如是矣

（一表）

是故曠劫已来　輪廻生死海　不出火宅也　阿弥陀佛之本願　蓋為之発起　於無量永劫之前　修衆生成佛之正業　成就之曰南無阿弥陀佛　此一句名号　圓備萬善萬行　具足一切功徳　是故世人　深信此佛本願之道理偏念南無阿弥陀佛　則阿弥陀佛　将往昔修成之功徳授其人　一旦得成佛之正因　如軽車駟馬　順風揚帆　安坐即登彼岸　其節他力也　功効固如是哉　夫自力者多様劬労　而成否不可期　他力者　不用些劬労　而萬

德立即備矣　自力之与他力　其難易相去不啻天淵也
説譬説明之　今有両個人　相其将呉淞去　而甲者善疾
走　乙者腰脚柔弱　難以為伍　行数歩　乙者自知其難
及　廃同去之念　只茫乎亍彳焉而已　又有人教之曰

（一裏）

若要到呉淞　須乗火輪車去　安坐當到矣　於是乎乙者
往而坐車　火車即開行　一瞬而倚窓顧望　甲者瞠乎在
後　乙者不用些劬労　須臾到了呉淞　是豈乙者自力乎
　蓋火輪車之力也　人其執自力難行乎　将依他力易行
乎　自去思量可也　但執自力難行　而不皈他力易行
夫乃愚乎　然此愚也　猶為来世之計　尚知自愛之道
乃或可漸進　至如不思来世更生之如何　徒悕望僥倖
而不修道徳　不由仁義　不暁因果応報之道理　則自暴
自棄　猶擲千金身於餓虎　愚之甚矣　釈迦牟尼佛慇懃
教示之　言不豫修善　臨窮於悔　悔之於後　将何及乎
　宜速警覚　既皈他力易行道　信本願　念佛名者　外
則慈光照護　無復悪鬼災殃之患　故本宗不用消除災殃

（二表）

之法　内則佛智充満識心　坐知来世着落処　故心常有
歓喜　而怡怡焉　是以一世勤苦　若事乎君上　若事乎
父母　若交接乎長幼朋友　而思念此身既被慈光照護
則如何不道之事是為乎　既知有来世快楽　則今日有忿
怒難忍之事　皆得而安之　當自竭其本分　形骸以報国
家父母　識心以念佛願深重　熙熙暐暐　自適其天　則
不識不知順帝之則也　是故本宗門徒　非必読五車之書
而後為門徒　雖目不識丁　而内行誠慤　心地光明　有
諸内者　必彰于外　若子夏所謂雖曰未学吾必謂之学矣
　苟能如此　則今世為良民　来世為聖衆　豈不快哉
夫能焼者火之力也　能潤者水之力也　吾人能至如此之
地位者　豈自己之力乎　蓋阿弥陀佛大願業力所然也
（二裏）
他力易行之大道　豈可不皈依乎
上洋馬福堂刻印
（三表）
※空白
（三裏）

真宗説教第七号

前号説　成佛道有難易二種　由有自力他力之別也　然猶未説尽　故復詳申之　夫欲焼物非火之力則不能　欲伐木非斧之力則不能　其理三尺童子皆知之矣　然若有不由火而欲焼物　不用斧而要伐木者　莫不其謂之愚矣

曇鸞大師曰　愚哉後之学者　聞他力可乗　當生信心　勿自局外也　蓋此謂也　請試思之　凡世間之事業研究物理　拡充人智　則力可抜乎山　身可翔乎空　精神若徹　何事不成　是以人智済人事　猶火之焼巨薪而無遺也　然而要以此人智　而為現前之事則可　而為身後来世之計則不可也　猶欲以斧焼薪者也　人智何能為佛果之資糧耶　弥陀佛智　洞観之於因位兆載永刦　以

（一表）

無漏真実大悲心　而代衆生修成南無阿弥陀佛之名号也

此名号萬善圓備　萬徳具足焉　衆生心信口称　則阿弥陀佛本願之力　便為衆生成佛之業因力也　此即他力矣　善導大師此謂大願業力為増上縁　苟慮来世　応速皈他力本願而称佛名也　然有人謂釈氏之有天堂地獄

非実有天堂実有地獄　是勧善戒悪之一術而已　為愚夫
之妄作妄為　警惕其言行　有識者之前　無須煩言　請
試説之　凡渉世出世之諸善法　莫不以勧善戒悪為宗旨
　諸悪莫作衆善奉行　三世諸佛萬古不易之通教　是以
本宗所依之大無量寿経　亘人道佛道今生来世　而説善
悪勧戒懇切矣　世間帝王良法亦然　旌善賞功刑奸罰悪
　重法律而豫示善悪禍福　蓋是使民去悪就善　離人欲
（二裏）
居公道之方術也　然見国家有牢獄刑罰之法　賞賢賜孝
之典　乃云是勧戒之一術　政府之虚喝耳　非有実刑賞
　何憚之有　恣心快意　不顧廉恥　一味横行　殆至禍
起家亡　身受其殃　猶得言国家之牢獄是戯論而已乎
釈迦牟尼佛曰　當斯之時　悔復何及　天道自然　不得
蹉跌　是此之謂也　既而此人因犯重罪　身羈縲絏　多
方営脱　不能減軽其罰　一旦臨刑　噫危矣　此人之命
懸於舉刀一喝之間　偶会大臣一上罪疑惟軽　尚徳緩刑
之奏王心嘉納　即時出赦書　差官乗快馬飛馳　伝王命
而來　寛宥其罪　即時出萬死而得一生矣　此由大臣挽

回之力　差官奉王命而赦釈之　若以罪人自力　即百計千方欲求倖免不可得也　惟王命仁恤之他力　即転殃為

（二表）

福只一□閒耳　人由曠劫来　所積累之罪衍　而寿終神逝　下入悪道　猶如囚人之就刑　無復有可救之術矣　独有阿弥陀佛本願招喚之勅命　可以転危為安　只要汝一心念阿弥陀佛　守釈迦之遺誡　今弘通本宗之教法即是也　若有人深信此本願之道理　一心称其佛名　則此人曠劫来之所作罪愆　仗佛之光明　能一時鎔銷之　阿弥陀佛永劫修成之成佛因行　直成行者成佛之業道也　出無始之生死海　而登一如法性之妙華臺　他力本願之功徳　其若是広大矣　則焼滅煩悩薪　非弥陀光明智火則不能　斫断生死根　非本願名号利斧則不能　噫嘻夫聡明卓絶人傑　而全仗自力人智　猶不可為来世佛果資糧　況於碌碌庸庸者乎　蓋速皈他力　称佛名　転殃為

（二裏）

福請熟思旃

（三表）

※空白

（三裏）

真宗説教第八号

蓋力也者　固無形象　不可以目視　不可以耳聞　而亦可月得而視之　可耳得而聞之也　論其大者　則弥宇宙　遍六合　至其小者　則雖鍼頭毫末之間皆莫不有也　是在善用其力者　不為勢阻　不為物屈　則大者得勢　則可以包舉宇宙　雄飛四海　若或失勢　則鯨鯢亦不能免螻蟻之制

然則力之為用其事可謂大矣　在世間尚且如此　況出世法乎　是以我佛教　於其因道　説信　精進　念　定　慧五力　於其果位　説知是処非処智力等十力　蓋得出生

（一表）

死海而遊歩佛界之力也　苟非有此力　則不能出火宅而到□（築力）土也　樊噲　張飛　世之虎将也　隻手排堅闥　一喝却百萬之軍　其勇力可為爪牙干城之守　若運籌帷幄　指揮衆軍　決百戦百勝之策者　子房孔明之智力也　収攬其子房孔明之智力　而占有全局者　独漢高昭烈之大力也　是由気識高遠　籠罩萬有　攬人之力以為己力而已　千載人

称其高智　不亦宜乎　曇鸞大師曰　愚哉後之学者　聞他力可乗　當生信心　勿自局外也　請試説之　阿弥陀佛願之大力者　有鑒塵数無量之煩悩軍　而救衆生於生死海

（一裏）

底　入無為涅槃城之妙術　是此謂本願佗力　固不労衆生別作別修　衆生唯信乎心　称乎口之際　佛之因力果力輙為行者大信心業道力也　是他力可乗之所以也　有釈迦牟尼佛誠諦金言　亦有十方諸如来舒舌勧信之證誠　是以天台智者　法相慈恩　信其他力之可乗　而已遂西方往生

又柳柳州　白香山等　皆大雅鴻儒　継踵而願生弥陀浄土　高僧名士之願生西方　紀伝之所載不遑悉舉也　然則上古之賢哲　猶決自力不可　而帰本願他力　況乎後世庸庸人　而不信之不帰之　則豈不愚乎　夫子房也　孔明也

（二表）

是人而已　人得人之他力　而能廓清四海　而賛成帝業況於人得阿弥陀佛之他力者乎　道綽禅師曰　如十囲之索千夫不制　童子揮剣儵爾両分　豈可得言童子之力不能断策也　是他力之謂也　阿弥陀佛因時　洞観苦衆生　非愍

不能脱煩悩繫縛　不可思議永刧代衆生修願行　一切智力
成就南無阿弥陀佛名号也　善導大師曰　利剣即是弥陀名
是此謂也　衆生聞本願名号之道理　而行持之則此名号之
利剣　入行者信心之手　而一念断除無始以来之苦悩　善
導謂之横超断四流矣　既而名号利剣入行者信心　則行者

（二裏）

憑名号之侘力　駆除煩悩衆害　而占有無為涅槃城之人也
豈啻世間萬戸侯哉　無上之快楽非遠　□□（隨寿カ）之長短　纔
問一世耳　可不歓喜乎　是故真宗行者　胸裏常有春風
而身体温和也　難忍之忿怒能忍　而不失忠信　難慎之私
心　能制而不企非望　孜孜淳淳　奉王法之憲典　娯室家
之和楽　至以終天年　則豈不二諦両全之好君子哉　是行
者一念信心　占有阿弥陀佛之無量力故　其他力信心之力
無可目視　而発之行者之言行　則歴歴了了可復視而称
誉也　噫他力信心之益　可不欽慕哉　請世之君子　注意

（三表）

熟思焉

上海新北門内謝潤卿刊

（三裏）

真宗説教第九号

如来所以興出世　難説弥陀本願海　五濁悪時羣生海　応信如来如実言　此是日本親鸞大師偈也　各位善男　善女請且諦聴焉　釈迦牟尼如来　何為而出世　何為而棄王位　捨妻子　而茹苦含辛　行諸難行乎　曰　如来出世蓋有一大事因縁　何謂大事因縁　即是説弥陀本願也　経曰　如来以無益大悲　矜哀三界　所以出興於世　光闡道教　欲拯羣萌　恵以真実之利耳　噫弥陀本願　極広大極深遠　無佛可比　且譬海以喩其萬一而已　問如何深遠

（一表）

乎　曰　過去十刼之昔　有王其王　施仁行義　撫孤恤鰥　棄国損王　出家為僧　其名曰法蔵　発無上道心　五刼思惟　永刼修行　遂果成佛　現今弥陀如来是也　其修行甚苦忍毒　不為自也　代一切衆生為之　五岳雖高　蒼海雖深　比弥陀慈悲　卑且浅矣　問如何広大乎　曰　弥陀如来誓願曰　十方衆生　称我名号　下至十声一声　若

不生者　不取正覚　言十方者　不論中国日本　南海北洋
舟車所至　日月所照　天所覆　地所載　若男若女　若飛
禽　若走獣　苟来聞本願　一声南無阿弥陀佛者　其生也
（一裏）
昼夜護念　其死也　抜苦与楽　必到浄土　即證大覚
豈不広且大乎　但言聞者　非徒聞　須聞本願生起本末
此経即無量寿経也　阿弥陀　是天竺語　中国訳曰無量寿
然則無量寿経　是阿弥陀経　在阿弥陀経中　言道教者
惣指一代佛教　言真実之利者　別指弥陀本願　経曰光
闡　偈曰説　相同　第三句五濁悪時羣生海　五濁　一曰
刼濁　二曰見濁　三曰煩悩濁　四曰衆生濁　五曰命濁是
也　請看今時　人情漓薄　見忠為愚　見善卻笑　君子甚
少　小人甚多　顔子屢空　孔子遭厄　自古而然　況今不
（二表）
如古乎　噫五濁悪時哉　経曰羣萠　偈曰羣生　羣生与衆
生一般　衆生有二義　一曰衆縁和合義　一曰衆多生死義
此死彼生　三界六道　展転受生　所謂十善生天　五戒
生人　而天上之寿有限　人間之命不長　盛者必衰　会者

常離　上自王侯　下至匹夫匹婦　皆不能免焉　十界中除
卻佛界　地獄　餓鬼　畜生　修羅　人　天　声聞　縁覚
菩薩　皆摂衆生中　故加海字　以形其広大也　第四句
応信如来如実言　此是親鸞大師勧信言也　龍樹菩薩曰
若人種善根　疑則華不開　信心清浄者　華開即見佛　請

（二裏）

看無信人　一味詐偽　為子不孝　為臣不忠　臣欺其君
子欺其父　兄弟相欺　夫婦迭誑　貪欲奪目　瞋恚失身
愚癡喪心　貴宦不貴　高位不高　経曰　如是之悪　著於
人鬼　日月所見　神明記識　故有三塗　無量苦悩　可畏
人之無信　朋友疎之　親戚背之　孔子曰　民無信不□（立カ）
凡衆悪之本　皆来自無信　経曰　言行忠信表裏相応　真
宗有規　即履行此釈迦之遺誡　其一章　政府保護吾人
使吾人安其業　須尽臣民務　其二章　孝養父母　敬事師
長　莫忘子弟分　其三章　朋友相共扶助　長者兄礼　少

（三表）

者弟愛　莫失信義　大哉信也　佛法大如海　惟信能入門
故最重信　我等現是澆季之人　智慧眼盲　戒行腰腳

萎而不伸　大聖金言　如如実実　至心信楽　一声南無阿
弥陀佛　全仗佛力提撕　横超生死大海　必往生浄土　現
生定得諸般益処　将来受無漏法界快楽　唐朝善導和尚曰
　道俗時衆等　各発無上心　生死甚難厭　佛法遇難欣
共発金剛志　横超断四流　願入弥陀界　皈依合掌礼　時
難復得　法難再遇　各位　善男善女　仰聞釈迦金言　一
心誠信　弥陀本願　請莫迷岐路　上洋新北門内謝潤卿刊字

（三裏）

※以上